

第 22 回 石西礁湖自然再生協議会 議事概要

日時：平成 30 年 2 月 18 日（日） 9:30～13:03

場所：八重山合同庁舎 大会議室

■参加者

委員：個人 12、団体・法人 13（15 名）、行政 12（23 名）

傍聴者：5 名（記者 4 名含む）

■議事次第

1. 開会
2. 途中参加委員の承認
3. 話題提供
 - (1) 2017 年の石西礁湖の状況について（環境省那覇自然環境事務所）
 - (2) 近年の石西礁湖周辺の海水温変動の特徴（沖縄気象台）
 - (3) 沖縄県におけるオニヒトデ対策の取組報告（沖縄県自然保護課）
 - (4) サンゴの白化現象に対応する健全度モニタリング調査とは：適応と回復の条件
（静岡大学・鈴木委員）
 - (5) 「持続的島づくり」から見た陸域対策や観光開発の課題について
（東京工業大学・灘岡委員）
 - (6) 八重山でのサンゴ環境学習（エコツアーふくみみ・大堀委員）
4. 議題
 - (1) 自然再生事業 10 年間の評価・検証について
 - (2) 平成 30 年度以降の自然再生事業の進め方について
 - (3) 普及啓発冊子について
5. その他
6. 閉会

■概要

1. 開会

- ・土屋会長から干川委員の日本サンゴ礁学会の大会においてサンゴ礁保全奨励賞を受賞されたことが紹介され、同委員から受賞の報告と活動の様子の紹介があった。

2. 途中参加委員の承認

- ・第6期委員として3個人・団体（青木康夫氏、アグロフォレストリーいしがき、八重山漁業協同組合サンゴ種苗生産部会）の途中参加が承認された。

3. 話題提供

（1）2017年の石西礁湖の現状について（環境省那覇自然環境事務所）

- ・2016年の白化では大型のミドリイシがかなり死亡してしまい、それによって被度が低下し、定着量が減少した。
- ・スポットチェック調査の被度を見ると2016年の7月から12月にかけて白化の影響で半減していたが、今年6月、12月の調査では現状維持もしくは微増しており、被度減少は底打ちしたと考えられる。

（2）近年の石西礁湖周辺海域の海水温変動の特徴（沖縄気象台）

- ・2016年と2017年の違いは、2016年は5月頃の早いうちから水温が高かったが、2017年は夏から秋にかけて高かったことである。
- ・2016年夏も2017年夏も太平洋高気圧が沖縄付近に張り出している状況であった。また、台風の数も少なく、来ても一時的な影響しかなく、高水温が保たれた。

（3）沖縄県におけるオニヒトデ対策の取組報告（沖縄県自然保護課）

- ・2013年の稚ヒトデの調査結果から予察したとおり、恩納村の北部で2年後にオニヒトデが大量発生した。北部以外でも稚ヒトデが多く確認されたポイントがあり、精度を高めていく必要がある。
- ・各地域で実践していただくために、予察のモニタリングの手法を作成し、ホームページなどで一般に公表していくように準備している。

（4）サンゴの白化現象に対応する健全度モニタリング調査とは：適応と回復の条件（静岡大学・鈴木委員）

- ・健康なサンゴとは何か、不健全なサンゴとは何かということを協議会の中でも定義をしておくてはいけない。
- ・ミドリイシとエダコモンサンゴでは高水温に対し白化のプロセスが少し違う。エダコモンサンゴは白化の際、正常な褐虫藻体内で減少し、タンパク質がまだ残存している縮小した

褐虫藻になる、この縮小した褐虫藻は白化で飢餓状態にあるサンゴが消化している可能性があるが、一方、ミドリイシでは透明な形態のものになり、餌として消化できないのでミドリイシの方は回復が遅く、ダメージを受けやすいことが分かってきた。

- ・観察と測定と科学的なモニタリング、研究者、ダイバー、市民が一緒になって迅速に行動できる組織が必要である。

(5) 「持続的島づくり」から見た陸域対策や観光開発の議題について（東京工業大学・瀬岡委員）

- ・モニタリングサイト 1000 のデータを解析すると自然がもともと持っている回復力が目立って減退している。これは陸域からの負荷、赤土や栄養塩の負荷が原因と考えている。
- ・石垣の畜産は農業セクターの出荷額ベースで3分の2である。マテリアルフローの解析の結果、環境に出ていく窒素ベースの量は3.55倍となっており、島全体のリサイクルシステムをどう作っていくかが重要になってくる。
- ・海外の同様の問題を抱えているところと情報を共有し知恵を出し合う連携ネットワークを構築する必要がある。

(6) 八重山でのサンゴ環境学習（エコツアーふくみみ・大堀委員）

- ・昨年度までの15年間で1148人の小学生にサンゴ学習を提供してきた。
- ・八重山で行われてきたサンゴ学習の特徴は知識を得るだけでなく子供たちの学ぶ力、コミュニケーション能力を養うこと、子供たちが主体となって学習に取り組む中でいろいろな課題を発見する力を養うための体験学習法を当初から取り入れている。
- ・課題としてはサンゴ学習を希望する学校が増えており、予算が足りない。また、修学旅行などで県外からのサンゴ学習をしたいという問い合わせが増えているが、県外から何百人という話になると対応する施設がなく、受けられていない。

4. 議題

(1) 自然再生事業10年間の評価・検証について

- ・石西礁湖自然再生事業10年間の評価検証の進め方については、7月の前回協議会において、協議会構成員が提出した評価シートを基にこれまでの取り組みの評価検証を進める流れを承認いただいた。
- ・自己評価シートは、協議会構成員のうち計29委員から合計81枚を提出いただいた。
- ・自己評価シートの内容について、1月24日、25日に分科会を開催し、取組の成果や課題を報告いただき、今後の方向性等について意見交換を行った。
- ・協議会構成員から提出された自己評価シート及び分科会での意見交換結果を踏まえ、この10年間における「達成できた点」と「今後に向けた課題点」を整理した。

(2) 平成 30 年度以降の自然再生事業の進め方について

- ・全体構想では、「長期目標」、「短期目標」、「基本的な考え方」を基に、「展開すべき取組」を定めているが、10 年間の評価・検証の結果を踏まえ、平成 30 年度以降においてどういった取組を優先して実施していくかという取組方針が必要である。
- ・5 箇年程度で重点的かつより積極的に実施していくべき取組について抽出・整理を行い、それを今後の自然再生事業を進めていく上での当面の行動計画のような形で取りまとめたいと考える。
- ・協議会体制に関しては、現在のワーキンググループを協議会の中の部会の位置付けとし、行動計画を作成するうえでの各テーマに関して、その部会の中でしっかりと意見交換を行える場にしたいと考えている。
- ・今年度は協議会を 2 回開催してきたが、来年度も協議会を 2 回開催したいと考えている。1 回目の協議会で、今後の取組方針や重点的かつより積極的にやっていく取組に関する協議、協議会体制に関する協議を行い、新たな協議会体制が承認されれば、各部会でこの 5 箇年の行動計画を取りまとめるための議論を進めていきたいと考える。各部会から議論結果を 2 回目の協議会に報告・提案してもらい、そこで行動計画の承認が得られれば、平成 31 年度からその行動計画に基づいて取組を実施していくスケジュールを考えている。

(3) 普及啓発冊子について

- ・普及啓発冊子は 10 年間活動をして来たところを広く一般に向けて紹介したいという事で作業を行ってきた。
- ・対象としては中学生以上、できるだけ多くの方に読んで頂けるよう、わかりやすく伝えることを主眼として作っており、今年度中に完成予定である。

5. その他

- ・生活利用に関する検討部会、オニヒトデ対策小グループ、石西礁湖サンゴ礁基金の活動について事務局から資料の説明があった。
- ・鹿島建設とエコツアーりんばなからコーラルネットを用いた活動の報告があった。

6. 閉会

以上